

フィールドワーク・インターンシップ実践報告

道後地区を対象としたフィールドワーク実習の実践と課題

片岡由香・松村暢彦（環境デザイン学科）

A Practice of Fieldwork Studies at Dogo area and its Challenges

Yuka KATAOKA (Environmental Design)

Nobuhiko MATSUMURA (Environmental Design)

キーワード：フィールドワーク実習、ステークホルダー、道後地区
Keyword: field work, stakeholder, dogo area

【原稿受付：2017年12月19日 受理・採録決定：2018年1月10日】

要旨

愛媛大学社会共創学部の2年次に配当されている授業科目「フィールドワーク実習」は、学科・コースの領域を越えて、学生自らが複数の候補地から対象地を選択しフィールドワークに取り組むものである。学生らは、地域の問題を考え、課題を設定し、地域のステークホルダーの協力を得ながら、調査を実施し、課題解決策について考察を行った。本稿は、愛媛県松山市の道後地区を対象地としたフィールドワーク実習において、その実践内容を報告するとともに、学生らの学びについての課題を考察するものである。

1. はじめに

社会共創学部は、「さまざまな地域社会の持続可能な発展のために、多様な地域ステークホルダーと協働しながら、課題解決を企画・立案することができ、地域社会を価値創造へと導く力」をもった学生を社会に送り出すことを目的としている¹⁾。この目的のもと、2年次に「フィールドワーク実習」(以下FW実習)の授業が配当されており、専門領域横断の多様な視点から地域の課題について考え、コミュニケーション力をはじめとした地域のステークホルダーの方々と協働するための基礎的な力を身につけることを目指している。同様の授業は、他の教育機関においても課題解決型授業(Project Based Learning)として実践・研究が進められており²⁾、本学部では、学生自らが地域ステークホルダーに調査協力を求め、その反応を得ながら課題解決への企画・立案を進めた点に特徴がある。

本稿では、本FW実習の実施内容と学生らの学びの視点からみた課題について報告するものである。

2. フィールドワーク実習の内容

2-1 実施概要

平成29年の第2クウォーター(6月14日～8月2日)に、毎回1限～5限、全8回の行程でFW実習を実施した。その間、頻繁に学生が道後地区を訪れ、

現地のまちづくりに関わられている様々な立場の方々にヒアリング調査を実施し、道後商店街を行き交う観光客をじっくり観察しながら、調査データを収集した。

FW実習の対象地として道後地区を選んだ学生は45名であり、その内訳は、産業マネジメント学科19名(産業マネジメント10名・事業創造9名)、産業イノベーション学科4名(海洋生産科学1名・紙産業1名・ものづくり2名)、地域資源マネジメント学科12名(農山漁村マネジメント2名・文化資源マネジメント4名、スポーツ健康マネジメント6名)、環境デザイン学科10名(環境サステナビリティ4名・地域・防災6名)であり、全学科・コースからの学生が参加した。

事前準備としては、担当教員2名(筆者ら)が、道後地区のステークホルダー(道後温泉旅館協同組合の新社長、道後温泉商店街振興組合の三好理事長、道後温泉誇れるまちづくり推進協議会の宮崎会長、松山市道後温泉事務所の山下課長)に本FW実習の主旨や実施予定内容について説明をし、学生らの調査への協力や最終報告会に参加いただけるように依頼を行った。

FW実習の実施内容として、第1回～3回の1限目に担当教員からFWに取り組む上での知識として、問題提起や目標設定の方法、PDCAサイクルの説明を行った。



写真-1 まち歩きの様子

表-1 FW実習の実施内容

	日程	実施内容
1	6/14	ガイダンス、レクチャー
2	6/21	レクチャー、道後地区での自分の関心テーマを発表
3	6/28	レクチャー、第2回の内容でグループ分け、グループワーク開始、道後地区のまち歩きを実施
4	7/5	グループワーク（調査実施）
5	7/12	グループワーク（調査実施）
6	7/19	事前発表（最終報告会に向けての概要報告）、グループワーク
7	7/26	午前：最終報告会@子規記念博物館、午後：報告書作成に向けてのグループワーク
8	8/2	報告書の目次作成、アクティビティログの作成

また、全員で道後地区のまち歩きを実施した。その上で、各自が道後地区について関心のあるテーマや調査したい内容について発表し、その内容と近いテーマもしくは共感できるテーマと感じた学生同士でグループを組み、以降はグループワークによって授業を進行した。グループワークでは、各テーマによる調査計画の作成を行い、そこで地域のステークホルダーに対してどのような調査をし、どのような結果を得ようとするのか整理した。その計画書を元に担当教員が調査の進め方やアポイントメントの取り方など細かく助言を行い、FWを遂行した。その後、自分達が取り組んだ調査内容や提案内容について客観的な評価を得るため、また、その後の展開などを期待して、道後地区のステークホルダー(道後温泉旅館協同組合理事長、道後温泉商店街振興組合理事長、道後温泉誇れるまちづくり推進協議会企画委員長、松山市道後温泉事務所課長、松山アーバンデザインセンターディレクター)を前に最終発表会を実施した(表-1)。

2-2 学生らによる実践テーマ概要

本FWでは、まず、道後地区において、自らが関心を持っているテーマについて個別に発表してもらい、それぞれの発表内容に近いテーマや、近くなくとも共

感し一緒に取り組みたいと感じたテーマによってグループを組ませたところ、多様な14のテーマに分かれた。その後、各テーマ毎にグループワークを実施した。以下では、各チームの実践内容について報告する。

(1)外国人観光客へのおもてなし班

年々増え続ける道後地区への観光客を対象に、外国人観光客が英語表記などのサービスを必要としているのか、また、必要としているサービスは何かについて調査を実施した。調査方法としては、外国人観光客の追跡調査およびインタビュー調査のほか、商店街やゲストハウスで実際に外国人に接客をしている方へインタビュー調査を実施している。調査の結果から、国籍によっての観光行動の違いや、店主と外国人観光客の意識のギャップを明らかにしたものである。

(2)方言を使った資源の可能性

観光客にとっての魅力づけとして、方言を使った商店での会話の有用性について提案を行った。具体的には、松山市の文化・ことば課や道後温泉商店街での店主へのインタビュー調査による実態把握や、方言を使った取組みの先進事例について文献調査を行い、考察した。

(3)道後インバウンドプロジェクト

今後、道後温泉地区に新たな国・エリアからのインバウンド観光客を増やしていくための基礎調査を実施した。具体的には、松山市の観光・国際交流課、道後温泉地区の観光案内所にインタビュー調査を実施して現状を把握した。加えて、web調査による先進事例の整理を行い、考察へと結実させた。

(4)道後駅前改革

-賑わいある休憩スペースを目指して-

道後温泉駅前の広場空間、休憩スペースのあり方をテーマに、街頭調査・観察調査から現状の使われ方



写真-2 街頭調査の様子

や課題を分析・考察した。また、文献調査による事例分析を加え、道後駅前をにぎわい広場化するための提案を行った。

(5)道後温泉周辺地区における景観への取り組みに関する調査

道後らしい景観とは何かをテーマにした取り組みである。具体的には、文献調査によって道後地区の土地利用の変化や市のガイドラインを分析し、行政計画からみた道後らしさの抽出を行った。そして、ステークホルダー(道後温泉旅館協同組合のメンバー)の方々にアンケート調査を実施し、道後らしさに対する意識の把握を行った。その結果から、行政の取り組みと地域のステークホルダーの意識との共通点やギャップについて考察した。

(6)道後温泉本館改修工事を踏まえた道後地区の継続的発展への調査および、道後の新たな魅力創出に向けて

本館改修を念頭に置きながら食文化を含めた観光資源の開発可能性について調査を実施した。具体的には、文献調査・web調査によって分析・考察を行った。

(7)水路を生かした道後の魅力の創出

道後温泉地区の既存の資源を活かすため、水路に着目し、古地図や文献からその変遷について調査し、事例調査を加え、新しい温泉地の景観として水辺空間の有用性について考察を行った。

(8)道後の神社の観光化

今ある地域資源のソフト的な活用や提案として、若者たちに神社の魅力を伝えるパンフレットの作成とその効果の検証を行った。具体的には、道後地区内に点在する神社について、文献調査から得た情報を元にパンフレットを作成した。そして、そのパンフレットの評価について大学生にアンケート調査を実施した。



写真-3 作成したパンフレット(一部)

(9)道後公園(湯築城跡)の利用者調査と公園としての評価

史跡として有名な道後公園を対象に、歴史的な価値以外の公園としての価値について考察を行った。具体的には、学芸員やボランティアガイドへのインタビュー調査、利用者の観察調査を通じて、多様な利用や空間別の利用のされ方に関する考察を行った。

(10)道後で健康マネジメント-ウォーキング班-

現地調査や文献調査から、道後地区において、目的に応じたウォーキングコースを提案して健康改善効果を提示した。具体的には、地域資源調査を行いウォーキングルートを設計し、自らが設定したウォーキングコースを歩きカロリー計算を行った。

(11)スタンプラリーからフォトラリーへ

現在道後地区で実施されているスタンプラリーについての問題を現状調査より分析し、その代わりに地域の思い出づくりとしてのフォトラリーを提案した。

(12)道後マップ班

道後地区で現在配布されているマップ類について収集・現状分析を行い、ターゲットを絞ったマップの提案を行った。具体的には、道後の女子旅に特化したパンフレットの作成を行った。なお、本チームの構成員は全員女性であり、チームの個性を活かした提案といえる。



写真-4 作成したパンフレット(一部)

(13)Instagramを活用しての道後の魅力を若者へ発信
若者を道後に呼び寄せることを目的に、若者の情報源として普及しているInstagramを魅力発信ツールとして活用し、Instagramの効果と限界について考察を行った。

(14)浴衣で道後を華やかに

自然なコミュニケーションを街中につくっていくための浴衣の効果検証を行った。具体的には、メンバーが実際に浴衣で道後地区を回遊し、周囲の反応について調査するもので、その効果について考察を行っている。



写真-5 調査の様子

3. FW実習における学生の学びと課題

3-1 ラーニングログの作成

本FW実習の最終回では、各々でラーニングログの作成を行った。本FW実習におけるラーニングログとは、フィールド実習を通じて得られた成果や課題を個人の視点から整理・記録するとともに、個人の学修成果を振り返るレポートのことである。このラーニングログでは、「あなたの経験」「あなたの成長」「得られた教訓」について過去を振り返って最高5つまでのログを用紙に記入した。

45名中36名の学生が5つ目までのログを記入しており、ほとんどの学生がまち歩きの実施や調査開始時期から最終報告会に至るまで順序立てて振り返りができていた。このようなラーニングログの作成は、個人の取組みについて細かく振り返ることで、自らの反省と成長を促すことを期待するものである。

3-2 アンケート調査にみる課題

FW実習の最終回でアンケート調査を実施した。アンケート項目は、主に、1) 道後地区を選んだ理由、2) 教員による授業設計に関する内容、3) これまで受講した授業で本FW実習に活かされた授業について、4) グループワークの問題点・反省点などについて回答を得た。

1) については、道後地区に関しては、FW実習の候補地の中で最も愛媛大学に近いということもあって選択した学生が最も多く、次いで道後地区に関心があったため選択した学生が多かった。また、授業回数については、多いと感じる学生が多く、同時期に実施された他の候補地での授業回数や1～5限の通しの授業構成であることも影響していると考えられる。

2) については、FW実習1～3回目の各回1限目に担当教員からレクチャーの時間を取り、問題提起や目標設定の方法、PDCAサイクルの説明をしており、そ

れらのレクチャーについて自らがどの程度意識して取り組むことができたのか回答を求めた。結果、「意識して取り組んだ」が7割、「意識しなかった」が2割であった。

3) については、入学してから今回のFW実習までの間に受講した授業で、取組みの際に役に立った(参考になった)授業名を回答してもらったところ、フィールドワーク基礎実習(回答16名)、社会調査法入門(回答9名)、初年次プロジェクト演習3(回答3名)、フィールドワーク入門(回答3名)などの回答があった。

4) については、グループワークでの問題点として、メンバーのモチベーションによって作業分担の差が生じたことや、方向性がなかなか定まらなかったことなどの回答が見られた。後者については、メンバーが異なる学科に所属しているため、実習時間外で十分な議論をする時間が取れなかったことなどが原因として考えられる。また、上記の問題点について自らがどのように克服したのかについて回答を求めたところ、自らが積極的に動くことや、メンバー間の役割分担によって解決したという意見が複数見られた。また、自分達の取組みについて改善すべき反省点の有無について回答を求めたところ、8割の学生が反省点があると回答した。

また、最終発表会での道後地区のステークホルダーからいただいたコメントについてどう感じたのか自由記述にて回答を求めたところ、評価されたことについての嬉しさや、もう少し意見交換をする場が欲しかったという意見も見られた。



写真-6 最終発表会の様子

4. おわりに

本稿では、松山市の道後地区を対象に平成29年第3Qに実施されたFW実習について、実施内容を報告した。

道後地区においては事前のステークホルダーへの協力依頼をしていたものの、学生らの関心テーマが多様であったため、当初の想定よりも多くの関係者にご

協力をいただく結果となった。これだけ多くのテーマでの調査や実践に取り組む結果となったのは、様々な学科やコースの学生が混合してグループワークに取り組んだことが影響していると考えられ、本FW実習の強みと言える。但し、学生らへのアンケート調査より、FW実習時間外での議論の時間があまり取れないことなど課題がある。

また、ステークホルダーへの最終報告会は、学生らにとって自分らの取組みについての客観的な評価が得られる機会として機能し、逆に学生らによる報告書の作成や提出については、ステークホルダーの方々から評価を受け、今後の関係構築に寄与するものと考えられる。

謝辞

本フィールドワーク実習を遂行するにあたり、道後地区のステークホルダーの皆様はじめ、松山市役所、観光客の皆様など多くの方にご協力いただきました。ここに感謝の意を表します。

参考文献

- 1) 西村勝志、榊原正幸編著(2016)：社会共創学概論,晃洋書房,pp.18-22.
- 2) たとえば、足立晋平、中尾憲司、山村彩、伊吹勇亮(2015)：PBL型授業において主体性が経験学習に与える影響,京都産業大学高等教育フォーラム vol.5,pp.159-167.

